

お茶うけ 第36話

宮大工を育てる

奈良の斑鳩(いかるが)の里の近くに『いかるが工舎』があります。(この『いかるが』の文字は、'角'偏に'鳥'と書く)この工舎は、斑鳩の宮大工西岡常一(文化財保存技術保持者)のただ一人の内弟子であった棟梁小川三夫が、自身が経験した徒弟制度の仕組みで、宮大工になりたいという若者たちをじっくり育てる場所として設立したものです。法隆寺のように、1,300年経った今でも美しい姿を保ち続ける寺院を建立するには、厳しい自然の中で育った癖のある逞しい木を使い、大勢の技術の優れた大工や職人が力を合わせ、2~3年の年月をかけて作業する必要があります。そのような作業ができる大工を育てようと、『いかるが工舎』では、師匠の西岡常一の言葉「塔組みは木の癖組み、人の心組み」をモットーに、法隆寺や薬師寺を建立した古代の優れた技法を、若者たちの手に作業の基礎からしっかりと憶え込ませます。



- 工舎の構成員は、大工(一人前の技術と人格を備えている)、引頭(ひきがしら、見習を終了して道具が使える)、見習(新入りの若者)です。
- 大工から見習まで全員が工舎に住み込み、一緒に共同生活をします。従って地方の寺院を建築する場合には、その近くに宿舎を置きます。現場に密着した場所で生活することで、作業の全容と、先輩や仲間の性格や長所などが分かります。
- 見習は、先ず食事作りを担当し、また仕事場の掃除などを行います。皆で出し合う食費の中で、食材を買い献立を考え料理するので、計画性と工夫する力が付きます。
- 見習は、時間があれば鉋(かんな)など、自分の道具を研ぐ技術の習得に励みます。棟梁が削った透き通るほど薄く均一な鉋屑を手本に、同じ鉋屑を出せるように鉋を研ぐ業(わざ)の手に覚え込ませます。棟梁は研ぎ方は教えませんが、本人が試行錯誤し、工夫を凝らして、研ぐ業を体得します。自ら工夫を凝らして問題を解決することを学ぶことで、実際の建築作業で予想外の問題に遭遇しても自分で考えて解決することができます。
- 作業現場が近いので、見習は大きな木を運んだり整理したり手伝います。木の感触を手で覚え、取り扱うコツを覚えます。見習の役割を会得します。
- 研ぐ業が手に付いたところで、道具を持って仕事ができる引頭になります。作業の段取りと、工程の進捗に合わせた作業内容を理解します。大きな木の作業は、一人ではできないので共同で取り組みます。

棟梁は、若者の個性を理解し優れた資質を伸ばして、集団の中で一人一人が個性を生かせるように育てます。例えば、Gくんは算数など学校の勉強は不得意ですが、素直で気立てが良く、研ぎの腕前は工舎でも一位か二位で、鑿(のみ)の腕前が素晴らしく、仕事も丁寧に仕上げます。小川三夫は、Gくんがいて、大勢の職人の心がまとまり仕事場がぎすぎすしないと高く評価しています。

新入りの若者は、この共同作業と生活を通して、自分の手に技術を覚え、人との共同作業の大切さを学び、集団の中での自分の役割を知り、一人前の大工に育っていきます。

この仕組みは、一見、効率優先の今の企業風土とは別の世界のことに思われますが、社会で働きだした若者たちが、仕事に働き甲斐を感じるようになる時のプロセスと、かなりの類似点があります。最近の若手システム・エンジニアたちの活躍ぶりを紹介している下記の記事で、彼らは仕事上の自分の役割を知り、人との共同作業の大切を悟った時、働く意欲が高まったと話しています。

(敬称略)

以上

参考文献:

『木に学べ』西岡常一著 小学館刊 1988年3月1日初版第1刷

『木のいのち木のころ(天)』西岡常一著 聞き書き:塩野米松 草思社刊 1993年12月3日初版

『木のいのち木のころ(地)』小川三夫著 聞き書き:塩野米松 草思社刊 1993年12月15日初版

『手業に学べ』塩野米松著 小学館刊 1996年5月20日初版第1刷

『特集 今こそ若手の出番』日経コンピュータ 1997年10月27日号(P-116~)